

# 「ベツレヘム」

向 井 考 史

冬の、冷たく澄んだ空気の夕方になると、必ず思い起こす匂いがある。私は1973年から約3年間、最初の留学生生活をSMUで送った。春から秋にかけてのメキシコ湾からの熱い空気が、12月の中旬に北からの冷たい空気に変わって突然寒くなると、風のない冷たく澄んだ日の夕方、家々の暖炉の煙の匂いに混じって、パンを焼く香ばしい香りが漂って来る。大学のすぐ近くにMrs. Baird's という大きなパン工場があるからである。暖炉で炊く薪とパンを焼く香ばしい香りの入り混じった匂いは、異国の地で一人アドヴェントの時を過ごす私にとっては、郷愁を駆り立てられる匂いであった。

イエス・キリストがお生まれになった「ベツレヘム」は、'ベート('家)どレヘム'(パン)の組み合わせであり、「パンの家」という意味である。このベツレヘムに一人の若者が住んでいた、と士師記17章は語る。彼がレビ人であったと紹介されているゆえ、この若者は25歳くらいの若い祭司であったのであろう。

どういう訳か、この若い祭司は、ベツレヘムが自分の住むべきところではないと考え、「住むべきところを尋ねて」旅に出た。若者が何故、ベツレヘムを自分の住むべきところではないと考えて旅に出たのか、その理由は記されていないが、推測するヒントは与えられている。「町」という言葉がベツレヘムに付けられていることである。

旧約聖書の中では「町」は、人間の欲望や醜悪さが集中的に現れる所として描かれている。ソドムやゴモラがその代表例である。もしかすると若者は、その町で見る人間の欲望や醜悪さに耐えられなかったのかも知れない。あるいは、町に現れる人間の醜悪さが、自らの中にもあることに気付いて、祭司という職務にふさわしくない自分に絶望したのかも知れない。彼は「住むべきところを尋ねて」旅に出た。それは新たな自分探しの旅であったと言っても良い。

新約聖書は、若者が見捨てた町「ベツレヘム」の、しかもみすばらしい馬小屋の中で、救い主イエス・キリストが生まれたと告げている。人の世の醜悪さの中に、飼葉桶に象徴される貧しさや惨さの中に、キリストは生まれた。そして、私達自身の中にある醜悪さ、惨さ、貧しさの中にも、キリストは生まれているのである。

(神学部教授)